

岡山市消防局との協定事業 防火カードゲームの遊び方考案に焦点を当てて

Agreement project with Okayama City Fire Department Focusing on devising how to play fire prevention card games

(2022年3月31日受理)

原 田 眞 澄

Masumi Harada

Key words : 防火カードゲーム, 保育, 官学連携

要 旨

中国短期大学保育学科は岡山市消防局と連携し、幼児向け防火カードゲームの遊び方を1年かけて考案した。これを「健康の指導法」の授業の一環として位置づけ、2年生104人を20グループに分けて全員にアイデアを考案してもらった。学生は消防局の方に講義をうけて火災や消火などの知識を学びながら、保育学生ならではのアイデアを考案していった。適宜消防局の方からアイデアに関する質問を受け、最終的には代表の6グループに絞って発表会を実施した。継続した取り組みのなか時間の経過と共に、学生が主体的に取り組むようになり、12月の発表会では発表をする側、聞く側が一つのテーマに集中し質疑応答も活発に行われた。この1年を振り返り、大学の中だけの教育ではなく官学の連携によるアクティブラーニングの実践を報告する。

1. はじめに

中国短期大学保育学科は、2021年（令和3年）度に岡山市消防局（以下「消防局」と称す）と火災予防を目的として「岡山市と学校法人中国学園における火災予防を目的とした連携に関する協定」を締結した。その主たる目的は、消防局が開発した防火カードゲームを、学童だけでなく幼児にも使えるような遊び方を考案することである。保育学生の柔軟な発想でアイデアを出し、消防局はそれを添えて岡山市内の保育所にカードゲームを配布し、防火教育の普及につなげるという計画である。

ただ、私にとっても保育学科にとっても官学連携による教育は初めての経験であったので、一つひとつの事がほぼ手探り状態であった。さらに、2020年に始まった新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、しばしば計画の変更を余儀なくされた。まさに紆余曲折の連続と言わざるをえないが、それでも結果的に主たる目的を達成で

きたので、この貴重な1年間の実績を明文化し官学連携の振り返ると共に次年度への課題を明らかにしておこうと考えた。

2. 経 過

本協定の内容の主たる目的は、先述の通りである。そして、それ以外の内容については、消防局と中国短期大学（以下「本学」と称す）の双方が適宜打ち合わせを行い決定したものである。具体的には、消防局の方が講師となり火災や消火活動など専門的な知見について授業を行うこと、学生の質問に対して消防局が回答するQ&Aの機会を設けること、消防局が主催するイベントに学生がボランティアとして協力することなどとした。これ以外にも必要に応じて連絡や調整を行い、双方が納得できる形で最大限の協力するよう努力した。ただし、主たる目的は先述したように保育所の園児が防火カードゲームで

遊び、遊びを繰り返すなかで防火教育の浸透と定着を図るという壮大な計画の一翼を担うことであった。

1) 対象の選定

本学は短期大学なので保育士養成期間が2年間と大変短く、大学の4年制と比べれば大きな開きがあることは想像するまでもない。それでも、消防局が期待する保育の専門的知識や子どもが喜ぶ遊び方のアイディアの量は、入学したての1年生より2年生のほうが豊富なことに間違いはない。さらに、2年生は保育実習20日間と幼稚園教育実習4週間があるので、自分たちのアイディアを保育の現場で実践でき、アイディアを微調整するチャンスにも恵まれる。以上のことから、対象学年は2年生が最適だと判断した。

2) 時期の選定

消防局と立てた計画では、2021年（令和3年）の4から取り組み、1年後の翌年2022年（令和4年）3月に完成ということであった。完成というのは、学生が考案した遊び方のアイディアを1枚の印刷物にして既存のカードと一緒に岡山市内の保育所に配布することである。単年度で完結させるとなると、9月スタートの後期では配布までがタイトすぎて間に合わない可能性が懸念されたことと、新型コロナウイルスの感染拡大について全く先が見通せないことから、総合的に判断して取り組みの時期は前期（4月から8月）が最適であると考えた。

3) 授業の選定

時期が確定した段階で、これを授業に組み込むか課外活動とするかについて検討した。2年生は保育実習が20日間あり、その期間は授業が休講になることから、不足したコマ数を通常の授業期間に補講を組んで充足していく。1日に5コマ授業することも珍しくはないのが実情である。もしも、このカードゲームの遊び方のアイディア考案を課外活動とした場合、その過密スケジュールに追い打ちをかける結果となり、学生の負担感がより大きくなってしまふ。さらに、課外活動にした場合学生それぞれにアルバイトのシフトが入っているのでスケジュール調整が容易なことではない。そうなった場合に最も懸念されるのは、時間に追われて十分に考えることなく表

面的な検討で終わるのではないかということだった。そこで、課外活動にするのではなく正規の授業時間を使い全員が集中して取り組める方を選択した。

正規の授業時間を使うことになったので、現行のカリキュラムの中で内容が合致する授業について検討した。協定を結ぶことについて保育学科専任教員で協議し合意を得たが、内容的に合致する教科についても「健康の指導法」が最適であると合意を得られたので決定した。この授業は（保育内容）健康に関する指導法を具体的に教授するもので、既存の計画と照らし合わせて災害に関する安全指導として実施することとした。15コマの内、妥当な割合を熟考してバランスよく計画することとした。

4) 具体的な授業計画と実施

「健康の指導法」の授業計画のうち、テーマに関係する内容について表1に示した。

消防局の方を外部講師として招き、大学にいながら消防署の活動や市役所の防火活動などについて講義をしていただくことについては、今回のような協定をしない限り発想することはなかったと思う。またとない機会なので入念に打ち合わせをおこない、2コマを担当していただくこととし、講義の内容については専門的なことをお願いした。新型コロナウイルス感染拡大による影響が懸念されることと、初めての取り組みで順調に進むかという不安もあったため、前期の前半で大方の内容を網羅できたらよいと考えて計画した。さらに、5月下旬から始まる保育実習において各グループで検討したアイディアを5歳児に実践することが可能となり、PDCAサイクルで改善することも期待できると考えた。アイディアの発表会を授業の終盤に計画したのは、単に消防局が採用するアイディアを絞るためのコンテストとしてみるのではなく、クラスメイト同士の情報交換が指導方法の知識になると考えたからである。本学が消防局という外部とつながると同時に、2年生が1クラス2クラスの区切りを超え横のつながりができる。

しかし、前期の授業開始早々、新型コロナウイルスの感染拡大により対面授業ができなくなってしまった。ゴールデンウィーク明けから本学の授業はオンラインに変更となり、5月下旬予定の保育実習も延期が決まった。打ち合わせをした段階で懸念していた事態ではあったの

で、焦らず根気強く臨機応変に対応するしかなく表2のように調整をして授業を実施した。

「健康の指導法」の授業15回のうち、カードゲームに関する内容は実質3回で消防局の方々による講義が2回、学生のグループワークが2回であった。また、授業内に実施予定だった学生のアイデア発表会は、かなり遅れて12月ようやく実施できた。それでは、一連の経過についての詳細を述べていきたい。

まず、第1回の授業で私から消防局と協定を締結したことを伝え、消防局から2年生に防火カードゲームを幼児向け（今回5歳児を想定）に遊べるようなアイデアを考えてほしいと依頼されていることを伝えた。防火カードはあらかじめ消防局から学生数を準備して下さっていたので、一人ひとりに配布し実物を手に取って説明を聞いてもらった。学生は、初めて手にするカードだっ

たためか、あまり興味を示しているようには見えなかった。次に、学生が考案するアイデアは印刷物になり、岡山市内の保育所に配布され園児に活用される計画も伝えた。その際、学生のアイデアには著作権というものが発生することも話し、著作権を誰がもつのかについてもふれた。もし将来的にそれを変更しようとする場合、著作権をもつ人すべての同意が必要になる。2年生のうち複数名が著作権をもった場合、該当する人全員の同意が必要になるので大変な時間と労力が求められる。反対に消防局にもってもらおうと、組織のなかで対応でき、時間と労力の心配がない。そうした理由から、卒業する2年生が著作権をもつよりも消防局にもってもらおう方が得策だと提案し、学生個々に承諾の意を表す署名を求めた。この判断は本学の顧問弁護士に相談しながらおこなったもので、学生にとって不利になることはないと考えた。学生104

表1 健康の指導法2021 授業計画案

回数	2クラス	1クラス	内容（テーマに関係するもののみ抜粋）
1	4月12日	4月15日	防火カードゲームについてオリエンテーション・著作権に関する説明と同意文書への署名
2	4月19日	4月22日	消防局の講義1 カードゲームの説明・ゲームの体験・幼児向け遊び方グループワーク
3	4月26日	4月29日	幼児向け遊び方グループワーク 1
4	5月6日	5月10日	消防局の講義2 火事の発生について 幼児向け遊び方グループワーク 2
保育実習期間に5歳児に防火カードゲームで遊んでもらう。			
13	7月12日		カードゲームのアイデア発表会

表2 健康の指導法2021 授業計画変更後

回数	2クラス	1クラス	内容（テーマに関係するもののみ抜粋）
1	4月12日	4月15日	防火カードゲームについてオリエンテーション・著作権に関する説明と同意文書への署名
2	4月19日	4月22日	消防局の講義1 カードゲームの説明・ゲームの体験・幼児向け遊び方グループワーク
3	4月26日	4月29日	幼児向け遊び方グループワーク（⇒アイデアを消防局に送付）
4	5月6日休講	5月10日休講	対面授業からリモート授業に切り替えのため、授業は休止される。
新型コロナウイルス感染拡大により、5月13日から6月18日までリモート授業に切り替える。保育実習も延期となる。8月19日から9月18日に変更となる。予定していた消防局の講義は一旦中止し、それ以外の内容を前倒して実施した。 5月13日と17日のリモート授業内で、第3回に回収したアイデアに対して、消防局のコメントを学生に紹介した。			
13	7月12日	7月8日	消防局の講義2 火事の発生 カードゲームのアイデアについてQ&A
前期の授業15コマの中で完結しなかった。保育実習が、8月19日から9月18日に変更となる。10月から幼稚園教育実習が予定されている。それらの経験を生かして、発表会につなげるように準備した。			
後期	12月17日（行事扱い）		カードゲームのアイデア発表会

人分の署名をもらい、いよいよ計画のスタートラインに立った。

第2回は消防局の方が講師となり、防火カードゲームの説明をされた。前回の授業で学生は手に取った程度だったが、説明を聞きながら防火カードゲームを体験すると、火事の原因や燃えたものや適切な消火方法などのクイズに真剣に答え、正解を聞いて声を上げて一喜一憂する姿が見られた。子ども向けに考案されたゲームといっても火災の現場検証に基づく内容なので、消防局の方から説明を聞いたたびにクラスメイトと関連する知識を情報交換するなどの姿が見られ、普段は意識していない火災や防火に対して興味や関心が高まったように感じた。次に消防局の方から依頼事項の説明があった。「保育を学んでいる学生さんに力を借りたい」「学生さんのフレッシュなアイデアを聞かせてほしい」「どんな遊びでも自由に発想してもらっていい」など、聞いている私にもどんな結果になるのかがまるで未知数な声掛けであった。はたして2年生になったばかりの学生にできるのか、という不安感とともに引き受けたからにはどうにかしなければ、という責任感を感じたのを覚えている。今から思えば学生の方が気負いはなく、すんなりグループワークを始めた。多くの学生が、自分に渡されたカードのイラスト面を上にして机一杯に並べ、しばらく裏の文字でイラストが示す内容を確認していた。

4月19日2クラスの授業内容については、消防局から報道各社に発表されていたこともあり地元のテレビ局と新聞社の取材が入った。授業が始まると教室のあちこちで撮影が始まり、報道各社の方が学生に対して次々と質問がなされていた。通常の授業であれば教員1人に学生50人の形態であるが、講師が外部の方というだけでなく絶えず取材を受けている授業となり特別な雰囲気となった。(図1・2・3)

消防局の方と報道陣の方は、学生のグループワークに近づき耳を傾け、気になったことがあればすぐに問いかけておられた。そして、質問された学生はものおじすることなく自分の考えを率直に述べていて、熱意と活気あふれる授業となった。この授業内容は、当日夕方KSB・RNCのニュースで放送された他、翌朝の読売新聞の記事に掲載された。また、後日oniビジョンのニュースでも紹介された。学生はグループワークの中で、5歳児対象



図1 消防局の講義カードゲームの説明



図2 グループワーク



図3 グループワーク

ということなので「1枚や2枚で完結する方がわかりやすい。」や、「ストーリーを話して、その通りに並べてもらうのはどうか。」などの意見を出していた。また、授業の終わりにインタビューを受けた学生は、「楽しく学

べるのが大切。自分から遊びたいと思えるようにしたい。」や「子ども達がすぐに手を出しやすい遊びになったらいいと思う。」などと述べていた。いずれも1年間の保育の学びをもとにした発言であり、保育の環境づくりや子どもの意欲に配慮した視点で述べられていた。余談ではあるが、取材内容がテレビや新聞で報道されたことを学生に伝えると、「自分も(テレビに)出たかった。」「(テレビに)映りたかった。」などの感想が聞かれ、19歳ならではの幼い一面を垣間見ることができた。本協定のおかげで体験できた非日常は、長期にわたるコロナ禍にあって久しぶりに味わった開放感だった。特に入学式も様々な行事も中止になった2年生にとっては、外部から誰かが入ってこられたこと、テレビに映ること、インタビューされることのひとつずつが特別な体験で、心がうきうきするような明るい気分を味わっているように思えた。学生の学習意欲は様々なものに影響を受けると思うが、あらためてメディアの力は絶大であると認識した。また、消防局の方々には火災や消火活動について生の体験をもっておられるので、大学にいながらにしてその体験談がきけることは極めて貴重な機会といえる。さらに、今回のように消防局の方主導で授業していただく形式の方が、学生の集中力も高まり理想的だと感じた。

翌週は、グループワークの2回目、引き続きメンバー間でアイデアを出し合うグループワークを行った。これまでのグループワークで出されたアイデアをA4サイズの用紙に記入して提出させた。1クラス2クラス共に10グループ、2年生全体で20グループから様々なアイデアが集まった。消防局の方にはすべての情報を報告し、後日コメントをいただくようにした。

ここまでは計画通りに進んでいたが、コロナウイルスの感染拡大によりゴールデンウィーク明けの授業が休講となってしまった。5月13日から全面的にリモート授業に変えて再開することが決まり、5月6日と10日に予定していた授業は実施できなかった。その1週間がリモート授業の準備期間に充てられ、学生個々が必要とするノートパソコンやルーターなどを個別に貸し出す手続きと各種設定の説明が行われた。あわただしく時間が過ぎる中、とりあえず5月6日と10日に予定していた内容(消防局の講義とグループワーク)については、当面延期することに変更した。当時、教員サイドには全学的にリモ-

ート授業を実施することに緊張や不安が大きく、リモート授業でグループワークを取り入れる方法まで検討する余裕がなかった。そこで、15コマの授業計画のうち防火カードゲーム以外の内容を前倒しで実施していった。5月13日と17日のリモート授業では、学生から集めた20個のアイデアについて、消防局の方からコメントを頂いたので口頭で伝えた。また1クラス2クラスそれぞれ10グループ分のアイデアに対するコメントも、すべて口頭で伝えた。消防局のコメントの概要は、「消防士には発想できないアイデアがたくさんあり、期待以上だった。主体的に考えていただき、楽しい遊びにさせていただいていると感じている。」という謝意と、「多くのグループが消火ゲームをメインとしていたが、防火カードゲームの目的は2つある。一つは火災が起こった後(事後)、もう一つが火災を防ぐ(事前)について考えてもらうことなので、事前の部分を考えてもらう要素のゲームも織り交ぜていただけたら、さらにより良いものになると思う。」という内容であった。消防局の方のコメントは、防火カードゲームに限定したことはない。園児に対する防災教育の要素として、災害予防と早期発見早期対応、つまり事前と事後両面の視点が必要ということである。アクティブラーニングのなかで、ひとつずつ大事なポイントを学べることに感謝した。これ以降、リモート授業はしばらく続く。私は、パソコンの画面に向かって学生とやり取りすることに馴染めず、せっかく軌道に乗っていた計画が頓挫したこともあり、本当にゴールまでたどり着けるのか先が見えない不安も感じていた。

結局、新型コロナウイルスの感染状況が落ち着くまで、5月下旬開始予定だった保育実習20日間も延期となった。対面授業は6月21日から再開となり、7月8日12日になってようやく消防局の方の講義とグループワークの2日目が実施できた。(図4・5)消防局の方から火災に関する動画を紹介していただき、炎の恐怖や煙によって視野が閉ざされることを学べた。この日は、学生が提出していたアイデアについて、消防局の方からグループに質問があった。学生は自分たちの考えを伝えていたが、同時に他のグループのアイデアを聞くことができた。学生は同じカードを使っても、遊び方はかるとやすごろく、クイズ、同じ色のカード集めなど子どもが好む内容を考えていた。



図4 消防局の講義 火事の発生



図5 グループワーク

コロナ禍とはいえ授業が間延びしたうえ保育実習まで延期となってしまう、実習で実践することを見込んでいたがかなわないままで前期授業は終了せざるをえなかった。

この事態を受け消防局と相談し、最終的に12月までにアイデアを一つに絞れるように計画を修正することになった。これによって、夏季休暇の8月に延期された保育実習と10月からの幼稚園教育実習で、各々が計画したアイデアで子どもと遊ぶことができる。教室で考えるだけでなく、保育の実践をすることでPDCAサイクルを使い改良が見込め、学生にとって最大のメリットになると考えた。一般に保育実習で低年齢児を受け持ち、幼稚園教育実習で年長児を受け持つことが多い。今年度もほぼ同じだったため、学生にとって保育所の年長児クラスに入ること自体敷居が高く感じられたようである。また、保育所の先生も初めて見るカードで馴染みがなかったた

めか、スムーズに実践には結びつかなかったようである。ただ、数名の学生は保育所の先生に了解が得られ、学生あるいは先生主導で年長児に遊んでもらったようである。以下の5人から、実施後の報告があった。(以下、原文のまま掲載)

学生A：避難訓練のあった日にカードを使用して3回クイズをして最後に火災についての話をして終わった。子どもだけでカードの使用は難しく保育士が主導で進めた。カードはB5サイズに印刷しホワイトボードに貼って使用した。

学生B：クイズ形式で行った。やはり、子ども達だけでゲームをすることはルールの理解など難しい点が多いとの事だった。しかし、楽しめるよう言葉を考えて分かりやすく質問をしたりすると、子ども達は積極的に答えていて、活動後に「楽しかった」と言ってくれた。保育者の方にも「面白かったし勉強になりました。」と伝えて頂いた。

学生C：終わった後、子ども達から「楽しかったあ」と言われ、楽しくゲームができた。

学生D：○×ゲーム形式でやった。粉末消火器と液体消火器の事を子ども達はなんとなく分かっている様子で、問題が簡単過ぎたという結果になった。

学生E：4歳児4人にカードを見せると興味津々だった。カードの意味を考え出した。「これはこうだから、こういうカード？」と聞いてきて、合っているとそのカードを自分のものにしていった。それを繰り返していた。その後、絵を見てかるたをしていた。読み手は「洗濯物がストーブの前に落ちて燃えた。」や「燃えるもの、油。」とっていて、私が「これはこういうカードだよ。」と教えたことにより、カードの意味を理解していた。カードの意味を理解していなかった時は、その都度私が補足で言葉をつけ足した。何回か繰り返し遊んで終わった。

子どもの発達段階や、実習園での防災教育によるレディネスなどの関係で、考えた遊び方が簡単すぎると言われた例もあれば、強い興味を示し遊びにつながった事例もあった。約100人は諸事情で実施できなかったが、

実施できた5人の学生は目の前で子どもの反応を確認でき大変貴重な財産になったと考える。グループで考えた遊び方は、手遊びや絵本の読み聞かせなど既存の遊びとは違って、反応が見通せない部分がある。一概に5歳児と言っても、実践して確認することや繰り返していくことでしかわからないことはあると思う。

幼稚園教育実習が終了した11月19日に、12月の発表会に向けた活動を始めた。これまで考えられた合計20グループの中から、一つに絞り込むための選考段階である。11月19日消防局から届いたフォーマットに対して、これまでにブラッシュアップしたアイデアを各グループから提出してもらった。学生とのやり取りは、インターネットGoogle Classroomを通じて行った。学内締め切りを11月30日とし、回収したデータは直ちに消防局へ送信した。選抜については、すべて消防局に一任した。12月3日消防局から選抜した6グループの通知があったので、該当するグループにも通知した。学生の中には、私が選定したと勘違いした者もいたようだが、消防局が主体の企画ということで、あえて私は関与しないようにした。

学生には、12月17日の発表会は消防局の方が4名来学されるので、出席者全員に理解できるようパワーポイントや動画などを使うよう依頼した。また、2年生全体に対して、前期開講科目の一環として取り組んできた発表会なので、全員参加して情報交換の場とするよう伝えた。発表が決まった学生は、2週間というタイトな日程ながら、授業以外の時間に動画撮影して準備するなど意欲的であった。当日の発表も制限時間10分間を十分使い、遊び方をわかりやすく伝えていた。教員が伝えたのは発表時間と内容のわかりやすさへの工夫だけであったが、学生は主体的に発表データを作成してスムーズに発表できた。2年間の授業もほぼ終盤であったため、子どもの特徴や保育観などが感じられる発表で大変感心させられた。4月の1回目の授業でカードを手にした時の表情とは全く別物のように、自信をもって発表できていて、発表に対しての質疑応答も問題なくできていた。(図6・7・8)

その後、審査の結果「みんなが消防士さん」という遊びを考案したグループのアイデアが製品化されることとなった。遊びのねらいは、ゲームを通して火災の恐ろしさについて自分なりに考えようとするとし、①今まで



図6 発表会の様子



図7 発表会の様子



図8 学生の質問

学んできたことを活かしながら火災が起こる場所について知る、②友達と考えを話し合い共有しながらゲームを行うとした。詳細は、製品化された図9を参照していただきたい。

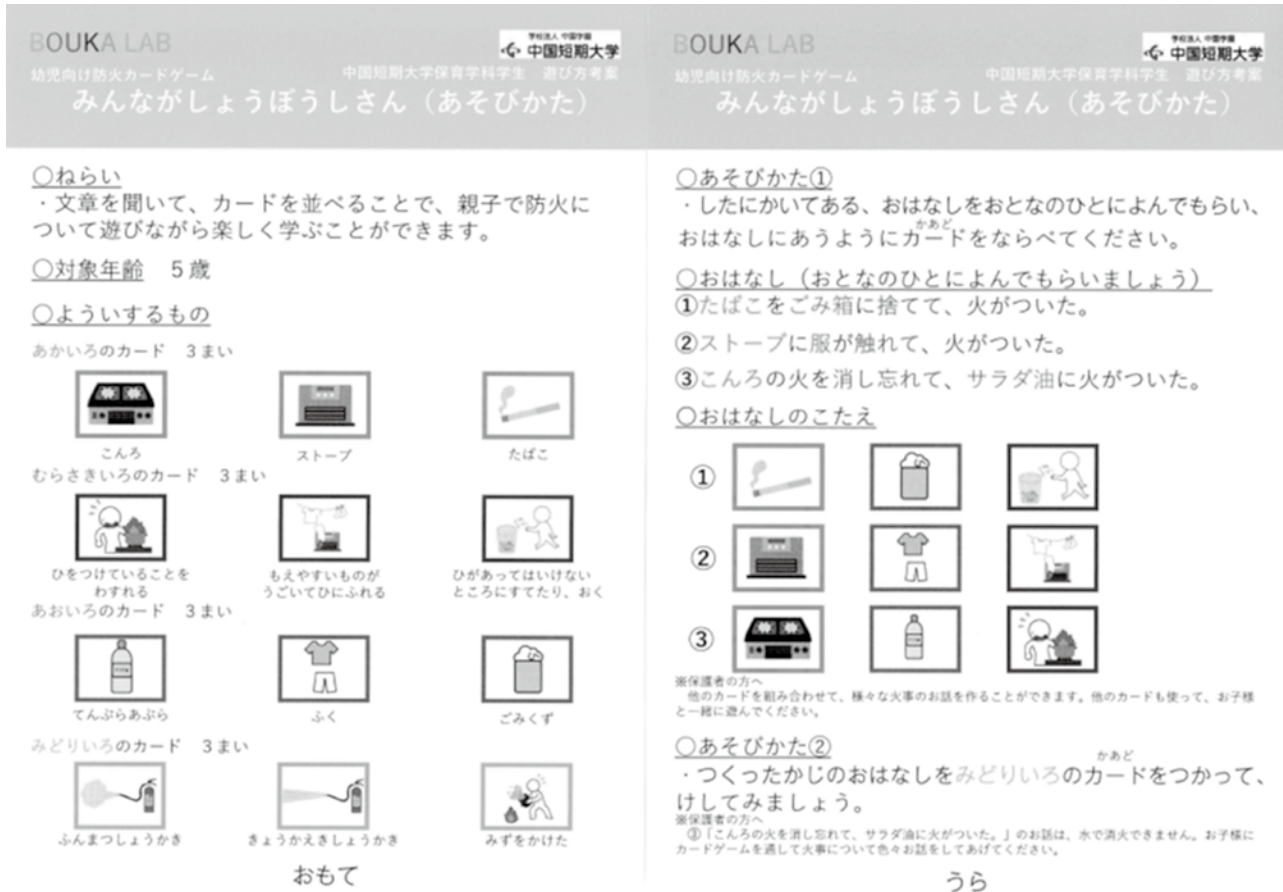


図9 製品化された遊び方印刷物 (おもて・うら)

3. 結 論

私は本授業を通じて、消防局との連携という貴重な経験をさせていただいたが、今回経過を振り返ろうとしたときに、大半の記憶があやふやであったこと全く忘れてしまっていたことが多かった。それは、世界中がコロナ禍という未曾有の病魔に襲われていたこと、それに伴い本学の教育が大きな影響を受けたことに起因すると考えられる。学生をコロナウイルスから守るための感染対策、対面とリモートの切り替えに対応した授業と予定変更、実習延期や学内実習への切り替えなど、とりあえず目の前の課題をこなすのが精一杯で常に何かに追跡されているような1年だった。日々無我夢中で突き進んだ感が否めないが、それでも無事にゴールテープを切れたのは、ひとえに消防局の方々のリーダーシップとサポートによるものと感謝の念でいっぱいである。そして、何よりも学生104人の真摯な取り組みの成果だと考える。

この官学連携の1年間を終えて一番の成果を上げるなら、学生の主体性が磨かれたことだと感じている。スタートした4月の学生の様子からは想像できないほど、12月の発表会では一人ひとりが我がこととしてカードゲームの遊び方を真剣に聞き、そして考えていた。取り組み途中の保育実習では学生全員に実践してみようことを求めたが、結果はたった5人しか実践しなかった。保育実習直前に、「実習前に園の先生に相談したが、〇〇の理由で断られた」という学生が1人いた。それを除く大半の学生は実習直後のアンケート調査に、「自分の受け持ちクラスが低年齢だから年長クラスにはいかない。」という回答であった。2年生は1年次の2月に施設実習が中止となり、やむを得ず学内実習に変更した学年である。通常なら保育所実習は施設実習に次ぐ2つ目の実習のところ、初めての实習という学生が過半数を超えていた。当該学生にとって実習に対する不安感や緊張感は計り知れず、日々の実習をこなすのに精一杯で、それ以外の課題

に取り組む余裕がなかったように思われる。受け持ちクラス以外に行って実践する意欲、年長クラスに行くために園の先生に交渉する勇気などがもてなかったのであろう。しかし、そんな中で実践した学生は5人いたのは、素晴らしいことだと感じた。学内の学びを保育現場で実践して、リアルな反応を見ることは大きな糧になったと思われる。

さて、今回のテーマとはそれるが、消防局の方々との連携の一環で前期の授業内で簡単なQ&Aのやり取りをしてきた。協定を結ぶメリットを最大限にするため、保育学生が素朴な疑問を投げかけて消防員が回答するというものである。授業時間ごとにグループで1つずつ質問を考えて、スマートフォンから消防局(QRコード)宛てに送付する。次の授業までに消防士から私に回答が届き、クラスごとにQ&Aを紹介するというものだった。質問の一例をあげると「消火活動で着用する防火服の耐熱温度」、「消防自動車が赤い理由」、「救急車が白い理由」、「消防士のトレーニング方法」、「過去3年間、保育所・幼稚園での火災」、「火災現場に向かう時の気持ち」などさまざまであった。授業で他のグループの質問と回答を聞き、まだ質問されていないことを考えて送信することを繰り返した。表面的な質問から少しずつ深くなっていった。せつかく消防士の方々との連携できるなら、普段の生活では聞けない素朴な質問に答えていただきたいと思った。そして、2年生が保育者になった時の避難訓練で、その情報を豆知識として子どもに伝えてほしいという願いもあったからだ。質問は表面的なことから少しずつ深まり、時間と共に学生との距離が近づき、同じゴールを目指す意識が醸成されたように感じる。そして、カードゲームに関する授業については、リモートではなく対面授業を貫いた。そのために、必要に応じて日程変更をした。だから、メールを介してQ&Aをしながら、並行して消防局の対面授業をしていただいた。また、最後12月の発表会も同様に、関係者の消防局の方々や学生が一堂に会して行われた。通常の特別授業は1日で終わることが多い、こうして継続することは他にない取り組みだと考える。長期にわたって繰り返す授業はやりっぱなしの企画と違い、火災予防や消火についての知識が定着しやすい。正しい知識がつくことで、それを子ども達に伝えたいというモチベーションとなっていく。少しずつだったとは思

うが、伏線でQ&Aを繰り返す計画が功を奏したように思われる。

そして、いよいよ最終選考となる12月の発表会で見た2年生の姿は、私が関わった9か月のなかで一番輝いて見えた。消防局の方に進行をお願いし、代表に選ばれた6グループが順番にアイデアを説明するプログラムであった。私からは発表時間と視覚的にわかりやすい説明をするよう伝えただけで、発表に関する指導は一切しなかった。そうすることで、グループの考えがストレートに伝わるのではないかと考えたからだ。予想した通りどれも子どもが楽しめるように考えられた見事な内容で、質疑応答もすべて保育を学んだ2年間を表す素晴らしいものだった。自分で考えること、それをアウトプットできる「場」を設けること、あらためてアクティブラーニングは自主性を引き出す教育だと痛感した。「健康の指導法」は講義科目であるが、座学の知識定着率は5%とされているように一方的な講義だけでは高い知識の定着は望めない。今回の経験を生かして、学生の主体性を引き出す教育方法を実践していこうと考える。

また、産官学の連携あるいは地域の方との連携による教育については、自分が関わるなど考えたこともなかった。依頼のお話を聞いた時、「引き受けることが誰かのためになるかもしれない」という思いが心をかすめ、思い切って挑戦させていただいた。結果的には、学生のため自分のためにもなって感謝の念しかない。そして、学生も私もコロナ禍でもなんとかなる、手探りでもなんとかできた達成感を味わえた。次年度も協定は継続するので、さらに充実した活動を計画していきたいと考える。

